

Subject: 読書会-第四回

From: junko <junko@glodia.jp>

Date: 2023/12/04 22:53

To: TAKUMI <takumi@coolboy.org>, 長島 亘 <W-nagashima@mbr.nifty.com>, 蜂須賀裕子 <hiro.hachisuka@nifty.com>, 久住 陸斗 <edgcum1@gmail.com>, 山田康平 <as6eyuafct@gmail.com>

CC: junko <junko@glodia.jp>

皆様 こんにちは

このところ温暖な日が続きますが皆様お変わりないですか？

読書会第4回目来週末12月16日（土曜）は匠さんのご指名により私が課題図書を選ばせていただきましたのでお知らせいたします。

（課題本）青い目がほしい トニ・モリソン ハヤカワ文庫

アメリカが舞台の小説で「青い目がほしい」が書かれたのは1960年代ですが1940年代に黒人の少女が人種差別・貧困や美の基準・偏見に翻弄されながら崩壊家庭を背景に自らも壊れていくストーリーです。

どうして彼女には自分が持っている美しさが分からなかったのか。或いはおそらくその後もけっしてわからないのか、また、どうしてそれほど根本的に自分を変えてもらいたいと祈ったのか、といったことについて何かを言おうとする試みだった。彼女の要求の底には人種的な自己嫌悪がひそんでいた。誰が彼女に教えたのか、誰が、本物の自分であるより偽物であるほうがいと彼女に感じさせたのか、誰が彼女を見て美しさが欠けている。美の尺度のうえでは取るに足りない重さしかないとしたのか。この小説は彼女を弾劾した眼差しを突いてみよう。 (P305 著者・あとがきより)

家族とは何か。彼女の悲劇はその彼女の両親の生い立ちともリンクし、不幸の連鎖が読者には圧倒的な驚きと悲しみとなって迫ってきます。

チョリーの生後四日目に、彼の母親は二枚の毛布と一枚の新聞紙で彼をくるみ、鉄道線路のそばのゴミの山におきざりにした。大伯母にあたるジミーは、姪が荷物を抱えて裏口から出ていくところを見て、彼を救い出した。そして剃刀とぎにつかう革砥で彼の母親を打ち据え、そのあと、彼女を赤ん坊のそばに近寄らせなかった。ジミー伯母は自分でチョリーを育てたが、ときどき命を救ったいきさつを彼に話して聞かせるのが楽しいらしかった。革砥の一件があつてももなく、母親が家出してその後、彼女の噂を聞いた人は一人もいない。(P195)

チョリーはおぞましい性加害者であると同時に（親に捨てられた）不幸な生い立ちであることを読者は知ることになり心ならずもチョリーへ憐憫の心情も生まれます。

匠さんの「家族をテーマに」という主題からもうひとつ選んでみました。

（副）この世の果ての家 マイケル・カニンガム 角川文庫

「この世の果ての家」は1970年代にともに青春を送ったゲイの少年とその親友がやがて成長した後には再会し、同居している年上の女友達と3人で血縁によらない家族を持つと試みる小説です。

以前バージニアウルフの「ダロウエイ夫人」をベースにした映画「The Hours」が余韻の残る良い映画だったので同じ原作者(マイケルカニンガム)の作品を当時読んでみようと思って手にしましたが、少々長い小説なので今回の読書会には間に合わないかもしれません。

皆様どうぞ宜しくお願い致します。

16日にお会いできるのを楽しみにしております。 中島順子

